

## 平成20年度第7回経営協議会議事要録

日 時：平成21年 3月19日(木) 13:30 ~ 15:30

場 所：特別会議室(事務局3階)

出席者：崎元 達郎、西山 忠男、阪口 薫雄、菅原 勝彦、森 光昭、山本 晃、辻野 智二、  
檜山 隆、江口 吾朗、小堀 富夫、園田 頼和、田川 憲生、平田 耕也、  
星子 邦子、丸野 香代子、小宮 義之

欠席者：小田切 優樹、倉津 純一、稲垣 精一、井上 孝美

### 議事要録の確認

平成20年度第6回会議議事要録が確認された。

### 議 事

#### 1. 平成21年度計画(案)について

議長から、第一期中期目標期間における平成21年度計画(案)について審議願いたい旨提案があり、資料1-1に基づき、年度計画(案)策定にあたっての基本的考え方等について説明があった。次いで各担当理事から、資料1-1・1-2に基づき、年度計画(案)の各項目の要点等について説明があり、審議の結果、原案のとおり了承された。

なお、議長から、本計画(案)については、3月26日の教育研究評議会及び3月27日の役員会の議を経て、文部科学省へ提出する旨付言があった。

#### 2. 平成21年度予算配分の方針(案)について

議長から、1月15日の本会議において了承され、3月2日の役員会において決定した「平成21年度熊本大学予算編成の基本方針」を踏まえ、平成21年度予算配分の方針(案)及び平成21年度予算配分(案)を作成したため審議願いたい旨提案があった。次いで事務局から資料2に基づき、内容について説明があった後、審議の結果、原案のとおり了承された。

#### 3. 平成21年経営協議会開催日程について

議長から、平成21年度の本会議の開催日程について、資料3のとおり年5回の開催としたい旨提案があり、審議の結果、原案のとおり了承された。

### 報告連絡

#### 1. 平成21年度における職員の給与及び勤務時間の取扱いについて

議長から、平成21年度における職員の給与及び勤務時間の取扱いについては、人事院勧告を重要な参考資料として対処することが平成20年12月3日の役員会において了承されたこ

とを受け、政策調整会議において検討を進めている状況である旨報告があった。次いで事務局から、資料4に基づき、検討状況について説明があった。

## 2. 発生医学研究センターの改組について

議長から、発生医学研究センターは21世紀COEプログラム及びグローバルCOEプログラムでの採択により国際水準の研究教育実績を蓄積しており、今後国際研究教育拠点としての高次の役割を果たすことを目的として、同センターを平成21年4月1日から発生医学研究所へ改組することとなった旨報告があり、資料5に基づき、改組後の組織の概要等について説明があった。

## 3. 文学部附属永青文庫研究センターの設置について

議長から、永青文庫「細川家文書」に関する史料学的・理論的研究の深化、熊本文化・近世熊本藩地域文化の研究の進展、並びに地域社会へ貢献する文化事業の展開を目的として、平成21年4月1日から文学部附属永青文庫研究センターを設置することとなった旨報告があり、資料6に基づき、同センターの概要等について説明があった。

## 4. 医学部附属病院の平成20年度収支見込みについて

議長から、資料7に基づき、医学部附属病院の平成20年度の現金ベースでの収支見込み等について報告があった。

## 5. 工学部「太陽電池・環境自然エネルギー寄附講座」の設置期間更新について

議長から、資料8に基づき、富士電機システムズ株式会社からの申し出により工学部「太陽電池・環境自然エネルギー寄附講座」の設置期間を更新（更新期間：平成21年4月1日～平成23年3月31日）することとなった旨報告があった。

## 6. その他

本学における受験者数減少の問題等について、種々意見交換が行われた。

意見交換の概要は次のとおり。（は委員からの質問・意見、はそれに対する回答等）

先ほど、受験者数が減少したという話題があり、これは少子化の影響によるものと思う。私立大学は以前から全国各地で受験をやっており、今後の受験者獲得のために熊本大学でも検討されていることはあるか。

今年受験者が1,100人減少したのは、医学部が足切りをするということを宣言したこと、そして、数学を従来よりもやや難しい問題にしたため、受験者が絞られたということが最大の理由ではないかと考えている。ご指摘のとおり、他の学部も軒並み倍率を落としており、唯一、文学部だけが3倍を維持したというのが現状で、今後しっかりした対策を立てないといけないと考えている。しかし、東京や大阪で入試の説明会をここ数年やっているが、その感触では、関東・関西からこちらを受験する人はなかなか増えていない。非常に少ないのが実態であるため、まずは九州からしっかり学生を集めたいと思っている。

個人的には、教員養成については、熊本県のニーズと本学の定員を考えると、教員になる率が低いという現状であるため、例えば、関西辺りの人で教員になりたい人を本学で育てて関西で教員になってもらうこともいいのではないかと、向こうから人を引っ張って来られないかという提案はしているが、あまりそれを推進すると、結局、熊本大学に教員養成課程が

ある意義があるのかということになるので、定員の問題も含めて考えていくべき問題であると思っている。

各地で試験を実施することについて、今は受験希望者がいないから実施しないということだが、やってみたら希望者が出てくることは考えられるだろうか。

例えば、対象として同窓会の子弟等を重点的にするということが効果があるのではないかと思う。ただし、教育学部の実技を伴う試験はそこではできないので、ある程度学部は限定されるかもしれない。

費用対効果をどの程度考慮に入れるかが難しいが、他大学の経験からは、かけた労力に対してそれだけの効果が上がっていないようである。

国立大学法人になってから地域化が非常に進んでいる。東京大学であっても、以前は日本津々浦々から受験者を集めていたが、現在は東京、神奈川、埼玉、千葉などが中心で、京都大学も然り。このような現状で、関東以北で試験をやってもあまり効果がないのではないか。せいぜい東海以西で、実施するとしても名古屋辺りではないか。

また、教育学部の問題は、定員の見直しをしないと具合が悪いと思う。学生が来てくれても先生になることができないのであるから、それにもかかわらず定員が多いということは、大変矛盾している。思い切った取り組みが必要だと思う。定員を減らして教育学部をどう特色づけるかということは知恵を絞れば出てくるのではないか。

中期目標計画に関連して、文部科学省では、教員免許に関わらない新課程をどうするのかという問題も指摘されており、早い時期に検討しなければならないと思っている。

かなり将来的な問題であると思うが、中期計画の中で、外国から先生を募るといった計画がある。国の方でも、人材育成、特に優秀な研究者の育成は喫緊の課題であるとされている。米国の特徴を考えてみると、米国は建国当初から世界中から人を集め、市民権を与え、今日に至っており、例えば、圧倒的にノーベル賞受賞者が多いのも当たり前のことである。そういう国を見て真似しても意味がない。留学生を30万人にすることを文部科学省は計画しているが、今までは、留学生を日本にとどまらせて、日本のために研究をさせるということを考えたことがない。このため、これから日本は、少子化で人口が減少する中で、思い切って、発展途上国であろうと優秀な留学生には日本に住んでもらい、日本で働きたいと思う人を日本にとどめることを考えないといけないと思う。今までの留学生のあり方は、国費であがなって、教えて、自国に帰ってもらうというもの。そのようなことを続けていては、中国、韓国に先を越されるのではないか。熊本大学辺りから、そのようなことを考えていただきたい。もう少しグローバルな視点に立って、これからの日本をどのような方向へ持っていくかということを経ひ大学が中心となって考えていただければありがたい。

今まで正しいこととして何十年とやってきたことが間違っている、これからは間違いである、と言われても誰も信じない。教育にしても同じことが言えると思う。米国では個人を非常に大切にしており、日本とは違う。教育の話聞いても、表彰の仕方も違う。アメリカの教育が全ていいとは思わないが、いろんな面でギャップが出てきており、我々は今、大きなギャップの上に立たされているのではないか。方向性をどちらに示すかという判断が非常に難しく、今までの累積データから見るとこういう方向がいいとは言えなくなっている。

グローバルな発想で、もっと発想の転換を教育の面でも考えるべきであるというご指摘としてお受けしたい。

学校運営のあり方が大きく変わってきていることを最近感じるが、通う本人そして通わせる家族の意識も変わってきており、単なるステータスだけではなく、大学で何を学んでどのように社会へ巣立たせ、貢献させるかということ、本来の学びという観点から考え直さないといけない時期にきていると感じる。社会の価値観が変化している中で、大学のあり方を考

える必要があると思う。

受験生が減少した理由について、試験のやり方が変わったからというご説明だったが、来年以降はどのような見通しなのか。

今後も今のまま推移すると思っている。医学部は受験生が多過ぎて、倍率が最大17倍まで上がり、適正な受験生の数を超えていたので、今回のような措置をとった。九州内の他大学を比べると、宮崎大学や大分大学の方が倍率は上がっている。本学は九州大学並みで、倍率は平均2.8倍というレベルになっている。これは、受験生が比較的入りやすい大学を受験するという傾向が今年は強かったためであろうと思っている。

定員を超えてきっちり学生が受験してくれれば、受験生が減ったことは心配しなくていいと思う。優秀な人たちが他大学に流れてしまうことこそが不幸なことである。

熊本から九州外に出て行く人が多いので、熊本大学はレベルが高いということをもっと知らせていくことが必要だと思う。質の高い学生に受験してもらわなければ意味がない。eラーニング推進機構は高い評価をいただいているようなので、そのようなものも利用しながら、熊本大学の教育・研究の一部を高校生にも分かりやすく見せて、それを九州、日本だけでなく、中国、韓国、東アジアの方にも発信する機会を増やしていくことがよいのではないか。

#### 退任委員の報告

議長から、今年度末で本会議委員を退任する学内委員（崎元学長、西山理事、阪口理事、菅原理事、辻野教育学部長、小田切薬学教育部長、倉津医学部附属病院長）の報告があった。

以 上

次回開催：平成21年 4月16日（木）13時30分から

#### < 配布資料 >

- 資料 1 1 平成21年度国立大学法人熊本大学年度計画（案）
- 資料 1 - 2 平成21年度計画総括表 ほか
- 資料 2 平成21年度予算配分の方針（案） ほか
- 資料 3 平成21年度経営協議会日程（案）
- 資料 4 平成21年度における職員の給与及び勤務時間の取扱いについて（検討状況）
- 資料 5 発生医学研究センターの改組について
- 資料 6 熊本大学文学部附属永青文庫研究センター 設置計画書
- 資料 7 附属病院収支（見込） ほか
- 資料 8 寄附講座の設置期間更新について